

最澄と徳一*

田村 晃 祐

一 日本仏教と最澄

ただいまご紹介いただきました田村です。どうもちょっと誉めすぎてくださったのではないかと思うくらいですけど。

私は、最澄について勉強しておりますので、天台宗の人だと思っていらっしゃる方が多いようですけど、私は実は真宗に属しております。それなのになぜ伝教大師のことを勉強しているかと言いますと、日本仏教の思想的な特色を考えてみると、鎌倉時代の新しい宗派を開かれた方々は全部若い時に比叡山で勉強している、ということになるわけですね。法然上人も十三才の時から四十三才で比叡山を出るまで、三十年にわたって比叡山で勉強されたということですし、そのお弟子の親鸞聖人も九才から二十九才まで二十年間も比叡山で勉

強し、そして修行された方であるということになります。栄西禪師も十五才ですか、比叡山に行つて受戒してありますし、その後、比叡山のお坊さんについて天台宗を学んでいらっしいますし、曹洞宗の道元禪師も、ご承知のように、十三才から十五才までになるのか、あるいは十八才までになるのか、よくわかりませんが、とにかく比叡山で勉強していらした。日蓮聖人も二十一才から三十二才まで比叡山で勉強された。

というようなことで、鎌倉仏教を開かれた方々は、みんなお若い時に比叡山に入つて勉強されて、そしてそこから独立して新しい宗派をお開きになった、ということになるわけですね。鎌倉時代の代表的な宗派の中で比叡山で勉強したことがないのは、おそらく、時宗を開かれた一遍上人だけであらうと思います。ただ、この方も直接比叡山には入られませんでしたけれど、法然上人の孫弟子の方について浄土教を

*御講演当日に配布された資料は本稿末尾に掲載（編集係）

勉強していらっしやるというので、真言系と天台系にもし大きく分けるとすると、天台系に属するということになるわけです。

鎌倉時代の仏教の宗派の中で、真言系から独立していったというのは、真言律宗というのがありますけど、これはそんなに大きな宗派にはならなかった。したがって、大きな宗派を形成し、日本人の心の救いというものを大きくなすとげていった宗派というのは、みんな天台から出ているということになります。

そこで、私は日本の仏教を勉強しようと思つたら、天台宗から勉強するのがいいのではないか、天台宗を初めて日本に樹立された伝教大師最澄から勉強するのがいいのではないか、と思つたわけです。

二 最澄の事業

ところで、伝教大師のなさった仕事というのは、大きくいうと三つあるということになります。一つは天台宗を独立した教団にしたということです。天台宗の教学自身は、奈良時代から日本に入ってきておりますし、特に戒律を日本に伝えた鑑真という方は、もともと天台宗のお坊さんであった。鑑真は天台宗関係の本をほとんど日本へ持ってきておりますし、そのお弟子たちの中で天台沙門という肩書きを使って日本で

活躍された方もある。したがって、奈良にも天台の伝統というのがあります、その一部分と思われるものが、『日本靈異記』という説話集のうちに、天台大師への言及という形であらわされています。

しかし、奈良時代は一つの独立した宗派ではなく、寓宗といいますが、ほかの宗派の方が天台も勉強しているというような形だったんだろうと思ふんです。それを一つの独立した宗派にしたことによつて、天台宗が日本仏教の根本を形づくつていったということ、これは大きな仕事だったんだろうと思ひます。

それから、次の問題は、戒律の問題なんです。戒律の問題は、国を護る、護国という思想と結びついているんですけど、最澄という方は若い時に近江の国分寺に入つて、国分寺で育つた方なんです。そうすると、国分寺というのは、何のために造つたかという、あれは日本の国を護るために造つた。その日本の国を護るために造られた国分寺で育つた最澄は、一生、国を護ること、仏教をもって国を護るといふことを心がけていらしゃいました。その関係で、大乘菩薩戒といふものでお坊さんを受戒させ、育ててゆくのでなければ、どうしても国は護られないだろうということで、普通は大乘戒壇独立運動と言われているものを行つたわけです。これは結局は伝教大師が生きていた間にはなしとげられませんでした

たけれど亡くなられた七日後に許可がおりまして、それから比叡山は比叡山で独自に、奈良の東大寺とか、筑紫の観世音寺とか、関東では下野の薬師寺というお寺で、日本中で三箇所あった戒壇とは別に、比叡山に戒壇をもうけるということができたわけです。今も皆さんが比叡山に行ってご覧になると、根本中堂の上の方に戒壇院というのがありまして、その伝統を受け継いでいるということになるんだと思います。当時奈良の仏教界は一つにまとまっていたと思いますが、天台はそれからも独立した教団になりました。

また晩年、東国に二ヶ所、中央に二ヶ所、九州に二ヶ所、計六ヶ所の宝塔を設けますが、これはいわば天台版国分寺であったのであろうと思います。

もう一つが今日の題にかかげました徳一というお坊さんとの論争なんです。最澄自身の著作の中では、一番たくさんの著作がありまして、戒壇問題よりずっと大きな著作がたくさんあるわけです。この徳一というお坊さんは、最澄と論争した頃には、会津にいました。京都の近くの比叡山と東北の会津にいた徳一が論争して、おたがい書いた本を相手のところへ届けるということだけでも大変な努力であって、非常な困難がつきまとったことだろうと思います。しかし、数年にわたって激的な論争を続けていきました。

奈良時代に一番盛んであった宗派は、法相宗という宗派で

す。法相宗の教学と天台宗の教学とでは、根本的にあいれないところがあります。それですから、伝教大師も京都にいらして、いろいろなところで、いろいろな場面で、法相宗のお坊さんと議論するということはかなりあったようです。部分的には、伝記なんかで、こういう時に論争したというところが伝えられています。

ただ、京都にいて奈良のお坊さんと実際に議論するとなると、これは話でやるわけですね。ものを書いてやるわけではないですね。今のようにテープレコーダなんか回しながらやるわけではないですから、話して議論するということは、そのまま別れてしまえばもう何も残らないということになります。おたがいの立場の相違というのは明確になっていくかもしれないませんが、けれども、記録に残るということはないでしょう。

ところが、会津にいる人との間で議論するということになりますと、今のよう便利な時代ではありませんから、どうしても本を書いて、そして相手の議論を批判するより仕方ないということになります。徳一の方も文章を書いて送ってくる。すると、それを受け取った最澄がそれを非難して、この考えはこういうことで間違っているんだ、お前はこういうことを言っているけれども、このお経にこういう風に書いてあるじゃないか、お前はそれに違反しているから間違いだ、

というようなことを書いてやるわけですね。すると、また向こうからその反論が来る。また、それに反論する。

論争というのは、始めたら自分で終りにするということはできないですね。自分で終わってやめてしまったら、これは負けたということになります。こっちも、とにかく議論がきたら議論を返さなくてはいけない。むこうだって負けられない。非難がきたら、非難を返すことになりますね。これは二人だけの間でやっているわけですけど、背景があるわけです。中国でも既にそういった議論が行われている。今まで、いろいろな背景があつて議論が行われてきたものですから、どういふ反論がきたら、どういふ批判をして返せばよいというのが、だいたいもうお互いにわかつてるわけですよ。それで延々と続く。ではどこまで続いたかといえば、これは伝教大師が亡くなって、一応は終りということになるわけです。

三 徳一

そういうことで議論をしていったわけですね。そこで、議論の相手になった徳一というのはどういふ人かという点、道德の「徳」という字に数字の「一」と書いています。ですから、「とくいち」と発音する人も多いようです。けれども、この人の名前は、数字の「一」の代わりに、「溢あふ」れるという字を書いている場合がかなりあります。皆さんにさしあげた資料

の中にも出てきます。ですから、数字の「一」のところに「溢あふ」れるという字をかわりに書いているとなると、なんて読むのがいいかという点、「溢あふ」れるという字も「いつ」だし、「一」という字も「いつ」と読めないこともない。ということでは、「とくいち」と読むのが正しいんだと言われております。ただし、徳一の本拠地である会津などに行つてみると、どうも皆な「とくいち、とくいち」と言つてるようですけどね。私は「いつ」が正しいんだろうと思つてます。

この人がもともとはどういふ人であるかという点、确实なところは、空海が徳一にあてた手紙というのが、『高野雑筆集』という空海の書簡集に入っています。それが資料の一枚目の終りの方に載っています。「聞くならく、徳一菩薩は」ということで、空海は徳一のことを菩薩と呼んでいるんですね。「戒珠氷玉のごとく、戒律を嚴重に保っている、それも氷のすきとおる玉のように非常に清らかに戒律を守っていると書いてあるわけですね。「智海泓澄たり」、智恵の海は非常に深く澄んでいる様子である、というわけで、弘法大師は徳一を絶賛しているということになるわけです。

「斗と敷として京を離れ、錫とを振とるといて東に往く」、斗敷とといふのは、いろいろな欲望を離れた生活をするということ、この中には街を離れて山の中に入って静かに生活するということも入っております。まあ、磐梯山のふもとにいたわけで、

なぜ磐梯山に行ったかということとはよくわかりませんが、弘法大師自身は、「あなたは住居に関する欲望を離れ、静かなところで坐禅をするために、京を離れて錫杖を振るって東に往った」というふうに書いていらっしやるわけですね。この裏に何があったかよくわからないのですけれども。

資料一枚目の最後のところの一番下の引文、これは最澄が書いているものですけど、「弱冠にして都を去り」と書いてあるわけですね。弘法大師も、「京を離れ」と書いています。ここから、徳一という人はもともと「京」にいた人だろうということがわかります。この「京」は、おそらく奈良の都でしょう。奈良の都にいて、「弱冠の時」に、「弱冠」というのは、二十才のことをいいます。あるいは二十才を少しすぎてもいいですが、徳一という人は、だいたい二十才頃までは都にいて勉強した。それから会津に移った、ということになるわけですね。

そして、「久しく一隅に居る」と書いてありますから、都を去ってからかなり長い間、会津にいたということになるわけです。それで、最澄の記述の上の方にも「会津・陸奥」と書いてありますけど、これは今でいう東北地方、あの辺全体が「陸奥」なんですね。「陸奥・奥州会津溢和上」、最澄は論争相手ですから非常な悪口を言ってるんですけど、たまにはこうして「溢和上」というような敬語を使っているようなところ

もあります。

こうして、非常に尊敬を受けたという人であったことがわかります。新しい宗派を開いたというような人でもありませんし、奈良時代から平安時代の初めに会津で活躍したというお坊さんの名前とか業績が伝わっているというだけでも、不思議なことだと言わなければならないけれど、最澄ほど有名な人ではないということになりますね。

そして、弘法大師の書簡では、東に行つて会津に初めて仏教の教えを立てて、そこで非常に広めたとしています。ここには引用しませんでしたけど、中国に初めて仏教を伝えた迦葉摩騰と同じような働きをした人だ、と非常にほめたたえている。

そこで、なぜ二十才まで京都にいた、ああいう大変すぐれた人が、会津などという、その当時は文化果つるところと言つたら会津の人に怒られるかもしれませんが、そういうところへ行つたのか、ということが問題になります。出身がどういう人であるかということとはよく分りませんが、鎌倉時代の文献になりますと、恵美押勝の息子であったというような説が出てきます。恵美押勝というのは、藤原仲麻呂という人です。恵美押勝という名を特別に朝廷からもらったということ、奈良時代に最も権勢をふるつた政治家であつたわけです。この人は聖武天皇のお妃である光明皇后の甥にあたりま

して、それで光明皇后に非常にひきたてられて、その権威をバックにして非常な権勢をふるった人です。それですから、もしこの伝説が正しいとすれば、徳一という人は光明皇后の甥の子供だということになります。徳一から見れば、光明皇后は大叔母、父親の叔母さんにあたる、というような関係の人ということになります。

室町時代にできた『尊卑分脈』という本は、いろいろな人の系列を示すもので、家系を知るためにはもっとも基本になる図書ですけど、この『尊卑文脈』では、ちゃんと仲麻呂の息子だと書いてあります。しかし、本当に仲麻呂の息子だったかということ、ちよつとよく分らないところがあります。とにかく、平安初期の人のことを鎌倉時代になってそう書いてあるのですから、だいぶ時間がたってますし、どうも本当かどうかよくわからない。もし恵美押勝の息子であったとすればですね、これは二十歳頃、ああいう遠隔の地に移らざるをえなかったという事実を説明するには都合がいいということになるでしょうね。なぜかということ、お父さんと言われていた藤原ノ仲麻呂という人は、弓削ノ道鏡が擡頭してくると、戦争になりました、道鏡側が最初に攻撃をしかけるのですが、仲麻呂はまず逃げまして、東北に行こうとしたようですけど、瀬田の唐橋の所といいますが、瀬田川を渡るところで先回りした道鏡側の軍勢が待ち受けていて、渡れなかった。そこで、

琵琶湖の西岸から舟で北国の方に抜けようとした。ところが、北の方へも先回りされていて、どうしようもなくて、西岸に戻って、そこで戦争になって、恵美押勝の一派は負けて一族郎党全部殺されたということです。

この時の戦いのせいで孤児になった人たちを、和氣清麿のお姉さんの法均尼という人が助けて育ててやったというような記述がありますし、敵方になった人で死刑になるところを法均尼が働きかけて助けてやった、というようなことも伝えられています。

その戦いの時に、押勝の子供は全部殺されたと伝えられているんですけど、実際には残っている人もいますね。はっきりしているのは、刷雄すしおという人なんですけども、この人は鑑真がなくなった時に追悼の詩を書いておりまして、鑑真の伝記の最後に藤原刷雄という人の作った追悼の詩が載っております。ですから、この人は殺されずにすんだわけですね。

そういう中で、徳一が本当に恵美押勝の子供だとすると、一族がみんな殺された生き残りの一人ということですから、適当な年齢までは奈良で勉強していても、二十歳くらいになったら、奈良にいられなくなって会津に移ったということの説明するには、都合のよい伝承ということになりますね。

ですから、これを史実であろうという学者もおります。しかし、その当時の文献をいくら検討してみても、徳一らしき

人は出てこないということ、これは事実ではあるまい、と考えている人もおありまして、どうもよくわからない、というのが実情だろうと思います。

ただ、大変な学者ですね。したがって、その名声が奈良の都まで、あるいは京都まで鳴り響いていた。だからこそ、空海も手紙を渡した。最澄も連絡をとっている。とにかく、平安初期に新しい宗派を作った最澄と空海が二人とも、徳一とコンタクトを求めている。ということ、徳一がああいうような田舎にいながら、いかに優秀な人で都にまでなりひびいた名声を持っていた人かわかると思います。

この徳一という人は、かなり厳格な人といえますが、自分の本当に理解できないことはやれない、というような人だったんだろうと思うんです。これは空海が書簡の中で何を頼んだかということ、まず徳一を非常にほめたたえている。まあ、本人あてに出した手紙ですから、少し割り引いて考えなくてはいけないということもあるかもしれないですけども、大変ほめたたえてですね、自分が中国からもってきた密教の本をぜひ写して広めてほしいということをお願いしているわけです。

この頼みを聞いたか聞かなかったよくわかりませんが、多分聞いてないんじゃないかと思えます。というのは、徳一は、空海が中国から持ってきた新しい書物に自分は疑問を感

ずるということで、自分はあなたのことを非難するというつもりではないんだけど、疑問をはらさないと本当に自分がそれを広めるということはできないから、疑問をはらすためにあなたに質問するといって、疑問を空海につきつけているからです。この本だけが実際に残っています。『真言宗未決文』というものです。

これに対して、空海の方はあまりとりあわなかったわけですね。これはまあ、空海は大人(たいじん)だからという批評をすればいいかどうか、よくわかりませんが、徳一からの返事をもらってもあまりとりあわなかった。著書の中で一つだけ疑問に応えたものがありますけど。あとの人がいろいろその疑問に応えています。ところが最澄はですね、疑問をぶつけられると、真っ向から反発するということをしていたわけです。

四 論争の背景

これだけ大きな論争になった背景としては、私はその当時の東国の仏教情勢があったと考えております。最澄は若い時から、東国にいた道忠というお坊さんと親しい関係にあった。この道忠という人は鑑真の弟子で、鑑真は日本へ戒律を伝えるためにきたのですが、大体は天台宗のお坊さんです。その鑑真のお弟子さんが東国に行っていた。今、群馬県の鬼石町

と、あるいは栃木県の栃木市のそばに道忠が建立した寺がありますし、また史実ではないかもしれませんが、埼玉県の都幾川村というところの慈光寺というお寺に、開山堂があって、道忠の遺骨を埋めたお堂とところだという伝承があります。そこで、開山堂の底を掘ってみましたら、骨壺が出てきた。その壺の中に入っていた遺骨を、東大の方に持ち込んで鑑定してもらったら、若い人の遺骨だということでした。しかし、道忠の遺骨ならそんなに若いはずはない。鑑真のお弟子だというなら、年代は決まりますし、最澄が関係していたなら、かなり長生きした人のはずで、そんなに若いはずがない。

ということで、開山堂の伝承は当たらないかもしれませんが、その道忠のお弟子との関係を見てみると、現在の栃木県から群馬県、埼玉県あたりにかけて非常に大きな勢力を持っていて、あちこちに弟子がいたことがわかります。

ところが、徳一の方はですね、中心になった場所は、今もうしたように会津ですね。会津は磐梯山のふもとに、恵日寺というお寺があります、ここで亡くなったという伝承があります。また会津の盆地の中には、勝常寺というお寺があります、ここには素晴らしい薬師仏があるので、平安初期の薬師仏のようです。徳一が実際に参りしていた仏だろうという、ゆったりした素晴らしい仏像があります。私はその仏像に初めておまいりしたのは、昭和三十一年の頃ですか、

上野の松坂屋で「古代の地方の仏像展」というのが行われた時、その仏像が出品されておりまして、徳一の詣られたものと解説があつてびっくりした記憶があります。地方における奈良末期・平安初期の仏像としては、非常に立派なものです。そのようなお寺があるのを初めとして、福島県、山形県、宮城県、茨城県あたりにかけて、うちのお寺は徳一が作ったとか徳一と関係があるという伝承をもった寺が、現在の寺院録みたいなものを調べていくと、五十箇所くらいあります。実際に私は徳一が五十もお寺をつくったはずはなからうと思うんですが、あとで東北地方から関東にかけて、自分の寺は古くからの由緒ある寺だといおうとすると、徳一菩薩の造った寺だということ、徳一に結びつけていったのではないかと思うのですね。

したがって、徳一がつくったという伝承を持ったお寺をたどっていくと、これは平安とか鎌倉とか後のことになるんでしょうけど、徳一信仰の広がりを示すものだろうと思います。五十箇所もがそういう伝承を持っているというのは大変なことだと思えます。それで、山形、福島、茨城にかけて徳一の影響が及んでいる。これは、これは弘法大師の手紙を見ても、「始めて法幢を建てて衆生の耳目を開示」した、つまり、初めて東北に教への幡を立てて人々の耳や目を開き示したとありまして、この人はやはり民衆にも仏教を説いていたので

はないか、民衆の中かなり入っていたのではないか、と思われまふ。このように、非常に広い範囲にわたって法相宗の勢力が、山形、福島、茨城にかけて広まる。茨城にもそういう伝承を持っているお寺がいくつかありますね。代表的なものでは、筑波山という山に神社があります。現在では筑波山神社とか筑波神社といつてますけど、あの筑波神社の拝殿の右側に掲示板が立っていて、これは徳一菩薩が奈良の春日大社から分霊して作った神社なのである、というようなことが今でも書いてあります。

そして筑波神社の左側には、大御堂という仏教のお寺がありました。徳一の開創だというような伝承を持っています。明治維新までは、神仏混淆で、最初にそこに建てたのは中禅寺という寺で、徳一が作ったんだという伝承があります。それから、筑波山のすぐ裏の八郷町というところに、懸崖作りと言いますかね、京都の清水寺のように山の斜面のところに舞台をしつらえて、下から柱でささえて作ったお寺に西光院とこのがあります。ここも徳一が作ったという伝承を持っています。茨城県にもあちこちにそういう伝承を持った寺があります。

そうすると、最澄に親しかったグループが関東の北から西側にいる。徳一の方は東北地方から関東の東側に大きな勢力を持っている。そういう背景があつて、両方とも負けられない

いということだ。議論を展開したんじゃないかと思ふんです。片方が負けたら、片方の勢力は具合が悪いということになりますね。最澄は弘仁八年に東国に行きます。この時をきっかけにして、二人の間で論争がおきて、最澄が亡くなるまで続けていったと考へているわけです。

五 論争の経過

その議論の内容から言いますと、資料の二枚目の図にありますように、徳一は『仏性抄』とか『中辺義鏡』とか『遮異見抄』とか『恵日羽足』とか、そして最後の『中辺義鏡残』というような書物を書いたということです。その間に、括弧をつけて『破原決権実論』としてあるのは、本の名前がわからないんですね。わからないけど、おそらくこういう内容の本を書いたんだろうというのが、ほかにもまだちよつとあります。

それに対して最澄は、まず『依憑天台集』というのを書いてます。これは論争のために書いたというより、別な目的のために書かれたものが論争の中でも使用されたというふうな本だと思ひます。それから、『照権実鏡』。私、この表を『最澄辞典』で書いた時からまたちよつと考へを変えましてね、『照権実鏡』は、その下に（『原守護国界章』）と書いてあります。実際には『原の守護国界章』よりも後に書かれたもので

はないか、ということを考えております。しかも、『原の守護国界章』というのは最澄が書いたものではなくて、道忠教団の關係の人が書いたものではないかというのが、現在の私の考え方です。なぜかという下、下に『守護国界章』と書いてありますが、『守護国界章』という本は、左側の徳一の『中辺義鏡』という本を批判して書いてある。『中辺義鏡』にこう書いてある、と引用しながら、この考えは間違っている、この考えは間違っている、というように書いていった書物です。

ところが、この『中辺義鏡』という本は、天台宗の考えを引用しながら、それを批判しつつ、それと同じことに関する法相宗の考え方をならべているというような本なんです。すると、『中辺義鏡』で徳一が批判した元の考え方というのは、すね、徳一が天台教学の中からピックアップしてきたものか、あるいは、誰かが書いた本が徳一にわたって行ってそれを徳一が批判したのか、というようなことが問題になると思います。

これまでは、最澄がこの文章をピックアップしてまとめたんだらう、あるいは、徳一がピックアップしたんだらうと言われていたんですが、徳一がピックアップしたという風に考えると具合が悪い。なんでこんなことを書いてあるんだらう、こういう風に書いてあるんでは、徳一が書いたとすれば具合が悪いのではないか、と思われる。じゃあ、最澄がピックアップ

アップしたとしても、なんでこんなことまでピックアップしたのか、こんなことまで書いたのか、変な思いがするんですね。どっちの人が書いたかと思っても変だということは、この本を書いたのは最澄でもなく徳一でもない。おそらく、関東にいた天台宗系統にいた人が書いたのではないか、そのため不充分なのではないか、という風に考えています。この表を作った時から、また少し考えを変えたということですね。

それから『決権実論』というのも、複雑な内容を持っておりますので、『原の決権実論』を最澄が書いて、それを徳一が『原の決権実論を破する』というのを書いて、それに反対するのが『決権実論』であって、現在ではこの『決権実論』だけが残っている。

それから、最澄は、中国の法相宗初祖の大乗基という人の書いた『成唯識論枢要』という本の一部を批判した。『通六九證破比量文』という本で現存します。すると、徳一はそれを批判して、仮の名前ですけど（『破通六九証破比量文』）というものを書き、最澄はこれの一部分を『法華秀句』という本の中で反駁しています。

この表のうち、二人の本の間の実線の部分は、確実に相手のその本を引用しながら批判したということがわかる部分です。点線で結んだところは、直接批判はしてないけど、おそらくこの本を読んで批判するという意味を持っているんだ

ろうというものです。

ということで、弘仁八年から弘仁十二年まで論争が続いています。次の年に最澄は亡くなってますので、死ぬ直前まで続いたということになるんだと思います。そこで、こういう議論を見ていくと、議論をしていく間に最澄独特の思想がつかりあげられてゆく。最初のうちははっきりしていなかったものが、だんだんはつきりしていくというようなことがあります。最澄の独自の思想は、最澄一人の努力でできたわけではなく、徳一という人が裏側において、この人が最澄教学をうんと批判したおかげで、最澄は独自な考えをだんだん作り上げることでできたんだ、という風に考えております。

徳一の方から言いますと、天台教学は間違っている、法相教学こそが正しい教学なんだということで、相手が一生懸命になって主張するから、それを常に批判しつづけた、ということになるんだろうと思います。

六 論争の内容

それで論争の内容は、大きく分けると、天台教学と法相教学の真实性をめぐる論争と、一乗思想と三乗思想の真实性をめぐる論争ということになるでしょう。天台教学と法相教学とは、同じような問題に対してそれぞれ違った考え方を持っています。たとえば、教判論というのがありました、これは

仏教全体をどう見るか、ということになります。天台では五時八教判と言いまして、五時教判は釈尊が悟られたあと、どういう順序で仏教をお説きになったか、その順序がどういう意味を持っているか、ということ、五つの時代に分けて考えるということをしています。八教とは、化儀の四教と化法の四教をいいます。化法の四教というのは、仏教全体を教学内容から四つに分けまして、それぞれ優劣を考えると、うなことをしています。これに対して、法相宗は三時教判で、釈尊の考え方というのを三つの時に分類しています。三時教判はいろいろな問題があるんですけど、ともかく三つに分類している。すると、五時に分類するのが正しいか、三時に分類するのが正しいか。あるいは、内容を四つに分けて考えるのが正しいか、三つに分けて分類するのが正しいかをめぐって議論するわけですね。徳一の方は、三つに分類する説き方は、お釈迦様が説かれた『解深密経』というお経の中に出てくる。お経の中に出てくるのだから、こっちは正しい。五時教判なんてのは、天台大師が勝手に作ったもので、お経の中に五時教判なんて書いてあるものはないじゃないか。勝手に天台大師が作ったものなんか間違いだ、というわけですね。ところが最澄の方から言くと、『解深密経』の中に書いてあっても、それはお釈迦様がそのまま説いた教えではないんだ。お弟子の菩薩が、「こういう風に考えたらいかがでしょうか」

と聞いたたら、お釈迦様が「それでよろしい」と答えられたただけだ。それに対して、五時教判の元になっている『涅槃経』の五味の説というのは、お釈迦様が直接お説きになっていないか。ということよなことで、あと、どういうお経にどういうことが書いてある、誰がどう言っているなんてことで、どっちが正しいか議論していくことになっていきます。

あるいは、『法華経』の解釈をめぐって、天台大師の『法華玄義』に書いてあるのはどうかということですね。法相宗ですと、『法華玄賛』という『法華経』の注釈書がありまして、だいたいそれをよりどころとして徳一は反論するわけですね。すると最澄は、天台の側から天台の考えに基づいて反論するということになります。また、『摩訶止観』という本があります。天台二大部とって、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』とありますが、その『摩訶止観』の内容について、徳一が批判しています。「止観」という言葉について、「法性は寂にして照らす」というようなことを『摩訶止観』で説いてますが、徳一は、止観というのは、我々行者が真実をどう見てゆくか、ということが「止」であり「観」であり修行であって、法性そのものの性格が止観なのではない、というような批判をするわけですね。そうすると、最澄は天台大師の立場に立って、止観の性質をもつ法性と一体になって「寂にして照」というような境地に入るのが止観だ、と主張する。というわけで、

それぞれの考え方をめぐって、天台二大部について議論してゆくというようなことがあります。この天台教学と法相教学の真実性というものをめぐる論争が一つですね。

それから、この問題が背景になっているんですが、もう一つ大きな論争に、一乗思想と三乗思想のどちらが正しいかという論争があります。一乗思想というのは、皆さんご承知のことを思いますが、すべての人は平等である、すべての人が悟りを得ることができる、という思想で、これは『法華経』の前半に書かれている思想です。これに対して、三乗思想というのは、現実的にはそうではない、人間には区別があるのだという思想ですね。生まれながらにしていわゆる小乗仏教、声聞や縁覚の立場にしか至れないというような人もいます。中には仏になれる素質を持った人もいます。それから立場が決まっていけない人もいます、この人はやりようによっては小乗仏教かもしれないし、やりようによっては大乘仏教で仏になれるかもしれない。それから、無種姓という、仏になる種をまったく持たない人がいる、というのが法相宗の考え方です。これは、ある意味では非常に現実的な考え方なんだろうと思います。すべての人が悟りを得ることができるというのは、非常に理念的な立場ということができるといえるのは、一乗思想を信じれば、なぜ三乗思想というものをお釈迦様が説いていらっしやるのかという方も解釈しないといけなくな

りますね。昔の人は、お経は全部お釈迦様がお説きになったと考えていますから、正反対の思想がある場合、こっちが本当なんだけど、ほかの意味もあって反対の側の思想も説いたと、反対側の説明もしなくちゃいけない。

徳一の方は、資料に書いたように、「三乗真実、一乗方便」、つまり、人間には差があるというのが真実なんだという立場です。これは仏性、つまり仏になる性質、そういうものからめての話ということになります。三乗仏教で差があるというのが真実だとすると、その反対の一乗思想、すべての人が仏になれるというのは、ある特定の目的をもってお釈迦様がお話しになられた方便、手段としての教えでしかないということと主張するというわけです。それに対し、最澄は正反対に、一乗真実、三乗方便、すべての人が平等に悟りを開くことができるというのが真実の教えであり、人々に区別があるというのは、人々を導くための手段にすぎないということと、真実と方便をめぐって正反対の主張をするわけですね。そうすると、どっちが正しいかということになる。一乗が正しい。なぜかというところ、『法華経』にこう書いているではないか、ほかのお経にこう書いているではないか、誰それがこう言っているではないか、といろんな文献をあげて一乗は正しいと主張します。教証と言いますが、お経の文章を引いて証拠とします。そして理証と言うのですが、道理の上で一乗

が正しいという主張をします。そうになると、法相宗側も、インド以来の伝統ある思想ですから、いろいろと反論できるわけですね。『法華経』には確かにそう書いてあるが、『法華経』は方便の教えなんだ、お釈迦様が特定の目的をもって説いたのであって、真実の教えではないんだ、ということとを、たくさんのお経を引いたり、論を引いたりして証明してくるということになります。

そうすると、そういう内容の本を受け取ると、最澄の方は、お前の主張するお経とは、本来はこういう意味のお経ではないか、お前が主張した論は、こういう意味での論ではないか、といって根拠を尋ねていって、やはりだから一乗が正しいと主張するということになり、両方とも負けずに論争を続けていったということになるわけです。

七 最澄教学の特色

そこで、先ほど、こういう論争の中で最澄の独自の思想が形成されていったと言いましたが、資料の次のところに「火宅の譬え」というのがありますね。「羊・鹿・牛」の三車は不必要であり、直接、大白牛を火宅に乗りつける、とありますが、最澄は三車は不要であると主張するわけですね。そして、『法華経』は悟りに至るまっすぐな道「直道」、一直線の道であるとするわけです。まっすぐな道となると、寄り道をしな

いわけですね。それから、「大直道」、大きなまっすぐな道、という表現も見えます。これは『無量義経』というお経に出てくる表現なんですけど、悟りに至るまっすぐな道だということです。これを火宅の譬えというのを取り上げて説明するんですけど、ある長者の家が屋根に火がついて燃え始めていた。その大きなうちの中に、二三十人の子供が、自分の家に火がついているのも知らないで遊んでいる。そのことを父親が知るわけですね。父親はなんとか全員助けたい。そこで父親は、羊の車をやるから出てこい、鹿の車をやるから出てこい、牛の車をやるから出てこい、というように、子供の好きないろいろな車を用意したから出てきなさいと言って、中の子供をみんな外へ出しておいて、実際には羊の車、鹿の車、牛の車なんかを用意してなくて、大きな白い牛がひく大きな立派な車を一台だけ用意して、子供たち全部を同じ車に載せて運んでいったといっています。これが一乗ということですね。全部が同じ車に乗って同じ安全なところへ、宝のところへ連れてゆかれるという話なんです。それで、「羊・鹿・牛の三車」は、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗にあたって方便である。なぜ方便かというと、家の中にいる子供たちを外へ引きだすための手段として、「与える」と言っただけで、実際に用意したのは一つの車だけです。みんなその一つの車に乗せて運んだということ、一乗思想、一つの乗り物という思想が最高であっ

て、三つの車というのは、実際には用意してなくて、子供を燃える家の外へ出す手段としてでしかない、というようなことを言うわけですね。

ところがですね、日本的というか、なんていうか、最澄は、もう羊車とか鹿車とか牛車とか言う必要はないんだ。小乗仏教で中の子供を引き出しにおいて、実際にはその人達を同じ一つの車に載せるというと、回り道となるわけですね。直接一乗を与えるのではなく、小乗で引っぱって一乗に乗せるのだから、回り道になる。日本ではこうした回り道はもう必要ないんだ。日本は大乗仏教の国であって、大乗仏教が入ってきてから三百年くらいたつ、もう日本では小乗仏教を与えてからなんて、そんなことを言う必要はないんだ。大きな白い一つの車を、その焼けている家にのりつけて、中からみんな直接載せて運べばいいじゃないか。直接一乗に乗せてまっすぐ運ぶというのが「直道」、まっすぐな道ということ、日本の国では小乗仏教なんかいらぬ。最初から真理そのものに入らせればいいんだ、というわけですね。

しかも、用意する父親というのは仏に当たるわけです。仏が仏の車を用意して、直接子供たちをその車に乗せるということ、これは悟りの世界に直接入れるという考えですね。資料の図のところ、因分の法と果分の法というのがありますが、因分というのは、原因の部分ということで、悟りに到

達するための原因の部分ということで、学問したり修行したりすることをいうわけですね。果分というのは、結果の部分ということ、これは悟りそのものです。普通に言いますと、仏教で悟りを得るためには、学問をして修行をして、それを重ねたあとで悟りに至ることができるといのが常識的な考え方ということになるでしょうね。ところが、最澄はそうではない、と云うのです。最澄の天台宗というのは、仏の悟りの法、果分の法の中に、迷っている人を直接入れ込むんだ、大白牛車に乗せるんだというんですね。

資料の図の下の欄を見ますと、「論宗」と「経宗」と書いてありますが、最澄は初めのうちは、奈良の仏教は論宗だと言うのです。法相宗は『成唯識論』という論を基礎にしている。三論宗は『中論』『百論』『十二門論』という論を基礎にしている。それに対して、天台宗というのは『法華経』というお経を基礎としているんだ。お釈迦様が説いたお経を基礎としている宗派というのは、インドの論師が作った論によってできている論宗、法相宗とか三論宗とかに比べると、お経の方が本なんだから、天台宗の方がすぐれていることと云っているわけですね。最初のうちは、法相宗、三論宗、天台宗を比較しているんですけど、奈良の仏教の代表的な宗派としては、あと小乗仏教では俱舍宗、成実宗というのがありますけど、これはあまり考えなくていいですね。律宗もありますけど、

最澄はあれも小乗仏教だと判定しています。

大乘仏教としては、法相宗・三論宗・華嚴宗と三つありますね。華嚴宗は『華嚴経』というお経による宗派ですから、経宗と論宗に分けるとなると、奈良の仏教の中にも経宗があるということになります。そこで、ちょっと議論の仕方を変えて、法相・三論・華嚴という奈良時代の仏教は因分の法だ、と云うのです。悟りを求めて学問して修行する法なんだ。それに対して、天台宗は、悟りそのものを直接与えて、悟りそのものへ直接ほりこんで、みんなを運んでいくような法なのだということ、区別していくことですね。

図のところには、それぞれの宗派の性格が書いてありますが、天台宗というのは「随自意」だ。随自意というのは、自分の意に従うということ。意というのは誰の心かという、これはいろいろなケースがありますね。非行非坐三昧などという際に随自意といいますと、行者の心に従うという意味ですが、ここでいう随自意とはお釈迦様の心そのもの、お釈迦様の心そのものが果分の法で、天台法華宗なのだ。それはなぜか。伝説によれば、天台大師とその師匠の慧思禅師は、お釈迦様が『法華経』を説いた時に、実際に一緒に聞いた仲間だということです。これは、天台大師の伝記に出てきまして、天台大師が初めて慧思禅師に会った時に、慧思禅師が、お前とはどっかで会ったような気がす

る。どこで会ったか、ということを考えてみると、お釈迦様が靈鷲山で『法華経』を説かれた時に、お前も来て聞いていたし、私もいて聞いていて、そこで会った仲間のような気がするという箇所があります。最澄はそれを取りあげ、だから天台大師の解釈は、お釈迦様から直接聞いたお釈迦様の法そのものなのだ、それが天台宗としてきているんだ。だから、天台宗の法は果分の法だ、悟りそのものの法だというのですね。それに対して、法相、三論、華嚴は随他意、つまり、他の人の意に従うわけですね。この人は幼稚園くらいの段階の考え方しか持っていないというと、応機説法といいまして、その人に合うようにお話をする。小学生くらいなら、それに合うように、中学生くらいなら、それに合うように話す。それぞれ相手に合うように説法なさる、というのがお釈迦様の説法ですね。

ところが、相手に合わせるとなると、相手の段階まで下げてゆくわけですから、どうしてもレベルが下がるわけですね。そのレベルが下がっているところを、「迂回道」とか「歴劫道」とかいう。つまり回り道であって、長い時間をかけて修行しなければならぬような話になるんですけど、聞いている人にとっては理解しやすい。それは理解しやすいですね。聞き手に合わせて話してくださいれば、理解しやすいということになる。

ところが、お釈迦様が自分の悟りそのものを話をされると、理解しにくい。「難解」です。「難解」ではあるけれど、お釈迦様の心にしたがったまっすぐな道、それが天台法華宗というわけです。それで、日本に大乘仏教が入ってきて三百年もたつし、もう回り道なんかする必要はないんだ。しかも「末法太だ近きにあり」とありまして、末法の時代がまもなくやって来る。そうした時代に回り道なんかしてられない。まっすぐに大きな広い道を通して、一直線に悟りの世界に飛び込むしか悟りは得られないんだ、ということ、仏から与えられた車に乗せられてそれに乗ってゆくというのが天台法華宗の考え方なんだ、ということになるわけですね。

八 結——最澄教学と日本仏教

私は、こういう考え方というのは、日本仏教の本質的な教義を形成する考え方、その基礎になっている考え方なんじゃないかと思うんです。それで、資料の「結び」というところに「日本仏教の特性」と書いておきました。こういう考え方があたるかどうか、いろいろお考えをうかがってみたいと思うんですけれど、私が今考えていることとしては、日本仏教の特性としては、「果分への直入」とでも呼ばばいいのか、悟りそのものの世界へ直接とびこんでゆくというのが、日本仏教の一つの大きな教義的な特性ではないか、と思うんです。こ

これは親鸞なんかもそうですね。法然もそうですね。南無阿弥陀仏と静かに念仏を唱えると、この時、既に阿弥陀仏の光の中に救いとられている、ということになる。修行して学問して仏の世界に近づいていく、というのではないですね。念仏を唱えさえすれば、そのまま仏の世界に入っていく。私は仏の光をいただいて、無明を消してゆくことができ。仏の光を頂くということはですね、暗い岩穴の中に何千年もとじこめられてきた暗黒の世界でも、そこに穴が開けられて光が入ってくれば、とたんに明るくなりますね。何千年も真っ暗だったから、徐々に明るくなるなんてことはないですね。どんなに鍾乳洞で真っ暗な闇の世界に閉じ込められていても、いったん穴があいて中に光がさしこめば、とたんに光の世界に転換する。同じように、無限の過去から無明を持って迷いの世界に入っていた衆生も、念仏を唱えるのとたんに仏の光の世界につつまこまれて、仏の世界の中に抱かれてゆく、ということ、やっぱり果分の法へ直接入るといような形ではないでしょうか。「煩惱即菩提」という考え方も、そういう系列になるでしょうか。

これは道元禅師もそうですね。坐禅をする時に、そこがそのまま悟りの世界に変換することなんだろうと思います。それで、坐禅をして修行して、その結果悟るといっているのではなく、坐禅そのものが悟りの世界、だから只管打坐、というこ

とになりましたし、本証妙修ということになりました。本証を妙修するのが坐禅という意味だということになりますと、私は果分の法の中に直接入るといって考え方の一つのあり方なんではないかという風に思います。

日蓮聖人の教学もそうですね。お題目を唱える時に、『法華経』の中にしるされている仏の悟りの法をそのまま与えられる。釈尊の因行・果徳の二法について「自然に彼の因果の功徳を譲り与え」という表現ですね。修行して学問して悟るなんてのではなく、お題目を唱えてそのまま釈尊のすべての功徳が与えられるということです。これもやはり果分の法に直接入っていく道だ、ということになるんじゃないでしょうか。この果分の法に直接入るといって考え方が、最も日本仏教の特徴をなす考え方ではないかと私は思います。

弘法大師の考え方も、密教というのは大日如来の心そのものだというので、同じ形をとっていると思うのですが、最澄とか空海とかによって開かれた道が、日本仏教の教理の最も根幹の部分を作っているのではないかと私は考えています。ですから、そういう意味で、最澄の教学の形成というのは、日本仏教の中で大きかったわけですし、私が鎌倉時代の仏教の人々の教理的な根本を最澄に探ろうとしたのは、間違っていないかと思つて喜んでいてというのが事実なのです。

それだけかという、修行の面で言うとき「專修」、一つの行を行うことに徹するということですね。中国の仏教は、どちらかというと、一つのお経とか一つの考え方を実現する。一つのお経に説かれている真理を實踐する。天台法華宗ですと、『法華經』に説かれている真理を体得する。そのためには坐禪をやってもいい、念仏をやってもいい、方等三昧をやってもいい、法華三昧をやってもいい。修行の仕方はたくさんあるんですけど、それによって到達しようとするところは、三諦円融とか一心三觀とか、というものです。天台の最終の目的は不可思議なんですね。その不可思議の世界を思議の世界へもつてこようとすると、一念三千とか一心三觀とか、円融三諦とかいうことになり、いろいろな修行の手段を通じて、そこに到達しようとする。

一方日本の鎌倉時代の仏教は、法然は專修といって念仏を唱えるだけ、親鸞はさらに念仏だけに徹していった。道元禪師は坐禪だけなされる。日蓮聖人は唱題をなされるだけ、ということ、一つの行に徹するということが、日本仏教の大きな特徴の一つだと思いますが、こういう專修は法然に始まると思っていいます。これに基づいていろいろな特徴があげられますね。速疾成仏、ただちに成仏するとかですね。果分の法に直接入るとすれば、ただちに成仏するということになるでしょう。もう一つあげておきたいのは、一乗という

思想ですね。これは聖徳太子に遠因するだろうと思えます。こういう風に、日本仏教というのは、いろんな要素が入っていて、そのうえでいろんな思想が形成されてゆく。法然の思想にしても、一乗道の思想や果分の法の思想も入っていて、そのうえで專修というやり方で浄土宗が確立されていった。道元禪師の場合も、やはり一乗の法をもって果分の法に直接入るということで、坐禪の法の上でそれを実現していったということができるといえます。こういうように、いろんな段階で形作られた法を備えて、鎌倉時代の仏教が成立してゆく。そういうところが、日本仏教の特性として考えられるんじゃないかと、私は思います。

ひとつ付け加えておきますと、日本仏教の中では、こうして涅槃をいかに実現するかという仏教本来のあり方を追求していったと同時に、もう片方では、民間信仰と習合する、儒教を取り入れる、道教をとり入れる、あるいは陰陽道みたいなものも入るとか、いろんな要素を取り入れた夾雑した思想。これを仏教と言っているのかどうか私はよくわからなくて、神道の思想が仏教の形をとって行われていると言えるかなとも思うんですけど、そうした夾雑した仏教というものがありますね。そうした仏教と涅槃を求めた仏教とが相まって、日本仏教を形成していると言うべきでしょうけど、涅槃を追求していった教学的に尖鋭化していった部分というのは、これ

まで述べてきたような特性を持っているのではないかと思うんです。

この二つの部分は全然別で、あつちは駄目だというようなものでもないだろうと、私は思ってるんですね。たとえば私は真宗に属し親鸞の方ですから、親鸞について言いますと、親鸞という方は、亡くなる時、「自分が死んだら遺骸を賀茂川に投げ入れて、魚の餌にしてください」という遺言を残されたと伝えられていますね。これは仏教の立場、真宗の立場、親鸞の立場から言いますと、それでよいことですね。死んだらとたんにお浄土に生まれて、悟りを得て仏になる。この地上に残った死骸は、魚の餌にしてくれてそれでいい、魚が満足するならそれでいい。仏教の立場から言えば、これは素晴らしい考えですね。今日の問題で言えば、脳死ということになるかもしれませんが、死骸を有益に役立たせることができばそれでいい、ということになりますね。親鸞の立場からいうとそういうことになる。しかし、遺言を受けた娘さんやお弟子さんたちは、その通りにはしなかった。ちゃんと火葬してお墓をつくったんですね。私はよく分りませんが、加地伸行さんという方が主張しているところだと、日本の仏教のお葬式のやり方は儒教式なんだ、本来仏教ではないと言っているらしいんですけど、そのお墓を中心として本願寺教団というのは発展してきたんですね。本願寺教団という教団が

形成されないと、親鸞の思想は一つの思想としては残るでしょうけど、信仰としてはなかなか残らなかったんじゃないでしょうか。実際に今、真宗のお寺ではお経をあげますね。親鸞は念仏だけ唱えればいい、南無阿弥陀仏と言えばそれでいいと言ったんですが、お寺でお経をあげますね。お葬式をしますね。法事をしますね。あれも、親鸞から見れば変なことだということになるでしょう。だけれども、あれで教団が続いてきたからこそ、実際に信仰としての命を保ち続けてきた。真宗では、法事の後に必ずお説教をします。法を説きます。親鸞の法を説くという機会は、親鸞からずれたことをやった後で出てくるわけです。そういうようなことで、私は葬式仏教といって非難するようなつもりはありませんけれど、教学としてのあり方の本質を追求してゆくと、先ほど述べたようなことになるのではないかと、というようなことを考えている次第です。

いろいろなご批判なり、ご意見なりを頂けると有りがたいと思います。時間をちょっと超過しましたようで恐縮ですが、これで終りにさせていただきます。どうも有りがとうございました。

（本資料は、御発表当日に配布された資料をそのまま掲載させて頂くものです。編集係。）

一、一研究の目的

二、最澄の略歴

神護景雲	元	七六七	一	生誕、近江国。後漢 孝献帝の子孫
宝亀	九	七七八	一二	近江国分寺行表（唐よりの帰化僧道璿の弟子）に師事
			一九	受戒。七月比叡山へ入る。この頃『願文』を作る
延暦	一六	七九七	三二	大安寺聞寂、東国道忠、経論助写。
	二二	八〇二	三六	高雄山寺（神護寺）に天台を講ず。
	二三	八〇四	三八	入唐。台州で道邃、天台山で行満等から学ぶ。
		八〇五	三九	越州で順曉に学ぶ。帰国。
大同	元	八〇六	四〇	年分度者許可―天台宗公認。

弘仁

	元	八一〇	四四	天台宗僧（年分度者）初めての得度。
	八	八一七	五一	『依憑天台集』
	九	八一八	五二	東国訪問。
	一〇	八一九	五三	小乗戒棄捨。六条式・八条式。『守護国界章』
	一一	八二〇	五四	四条式。
	一二	八二一	五五	『顕戒論』
	一三	八二二	五六	『法華秀句』
				六月四日逝去。

三、徳一

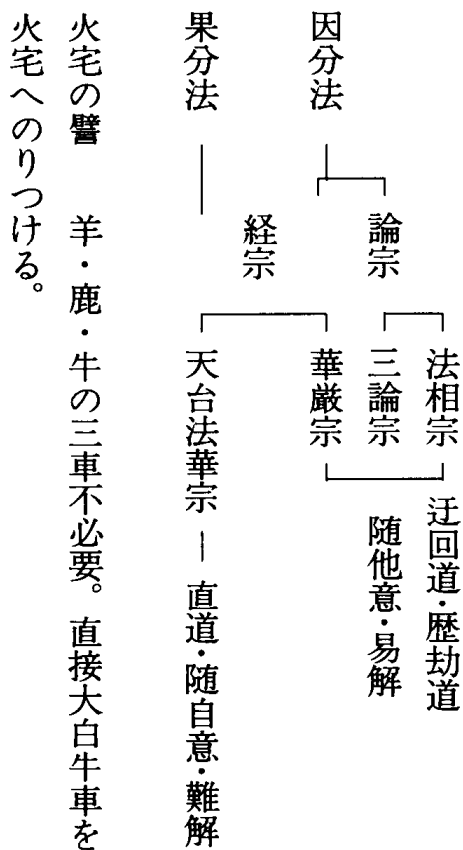
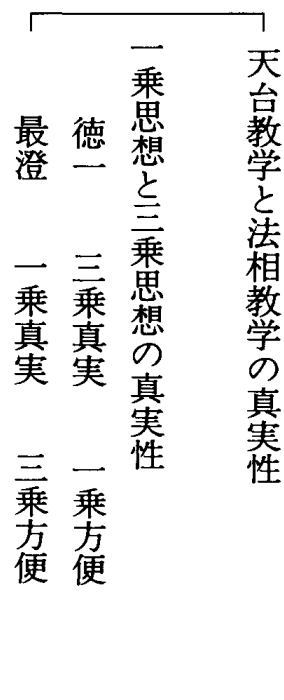
藤原仲麻呂（恵美押勝）の子息説
 空海の徳一宛書簡
 聞道徳一菩薩、戒珠氷玉、智海泓澄、斗藪、離京
 振錫、東往、始建法幢、開示衆生之耳目、大吹
 法螺、發揮萬類之佛種
 最澄の記述
 （会津・陸奥・奥州会津県湊和上、飢食者弱冠去、都久
 居一隅）

四、論争の経過

	徳 一	最 澄
弘仁7年?	仏性抄	依憑天台集
弘仁8年2月		照権実鏡 (原守護国界章)?
弘仁9年	中辺義鏡 ?	守護国界章 一乗義集?
	遮異見章 恵日羽足	(原決権実論)
	(破原決権実論)	決権実論
	窺基成唯識論枢要	通六九証破比量文
弘仁12年	(破通六九証破比量文)	法華秀句
	中辺義鏡残	

最澄と徳一 (田村)

五、最澄の思想の形成



鹿食者示す所の多分小乗の止観は歩行の迂回道に相い似たり、又多分の菩薩止観は、歩行の歴劫道に相い似たり。この二歩行道は教えのみありて修人なし。末法ただ近きにあり、法華一乗の機、今正しく是れその時なり。

六、結 日本仏教の特性

果分法 — 最澄より

専修 — 法然より

一乗 — 聖徳太子より